

能登川の生物

Notogawa's Wildlife

能登川町には、琵琶湖につながる水路や愛知川の湧き水の流れる水路が多くあり、昔から多くの魚がすんでいました。また、愛知川の堤防や織山にはさまざまな昆虫も見られます。現在では、これらの生物を保護することが課題となってきました。

内湖で見られる魚たち

ニゴロブナ、ギンブナ、ゲンゴロウブナ(コイ科)

近江特産で、能登川でも愛好家の多い鮒ずしは、元来ニゴロブナ(イオ)という琵琶湖固有のフナを材料にしたものでした。

しかし、ニゴロブナは年々数を減らし、現在では鮒ずしは高価な食べ物のひとつとなってしまいました。大中の湖が干拓されるまでは、葭地を産卵の場とするフナたちが、春先に群れをなしてやってきたそうです。

内湖では、現在でもフナがとれます。ギンブナ(ヒワラ)がいちばん多く、ゲンゴロウブナ(ヘラ)、ニゴロブナ(イオ)、どれも数は減り、現在、大きな課題となっています。

また、コイも多くいます。フナやコイは植物プランクトンや動物プランクトン、小動物などを食べ、水質が汚れても適応できますが、産卵できる場所やすみ家となるオダ(枯れ木などが水中にあるところ)やウロ(隠れ家となる窪みや穴)がなくなったら生きられません。とくにゲンゴロウブナとニゴロブナは琵琶湖の固有種で、全国で釣られているヘラブナの元祖は琵琶湖から送られたものです。

内湖では、フナ、コイ以外にオイカワ、モツゴ、カムルチーなどが見られます。

ブルーギル(バス科)

現在の内湖にいちばん多く見られる魚はブルーギルです。この魚は、外来魚で北米原産、動くものに敏感なため、ルアーフィッシングの対象として最適で多くの釣り人が内湖を訪れています。ブルーギルの名はエラブタの縁に青い大きな斑紋があるため、この名がつけました。昭和35年(1960)に日本に移入されて、底生動物や稚魚を食べどんどん繁殖しています。

オオクチバス(バス科)

ブルーギルと同じ北米からの外来魚オオクチバス(ブラックバス)は、数は減少してきたもののエビやカエル、小魚、ザリガニなどを食べてしまう魚で、これもルアーフィッシングの対象となっています。大正14年(1925)に移入され、内湖でもよく釣れます。

近縁種のコクチバスも増えてきました。調理を工夫すれば、おいしい魚です。



ニゴロブナ ゲンゴロウブナに似ていることからこの名がつけました。



ギンブナ(ヒワラ) いまいちばん多くとれるフナです。



鯛のようにきれいな魚・ブルーギル



ルアーフィッシングの対象オオクチバス

存在の貴重な魚たち

タナゴ(コイ科)

琵琶湖の周りの河川にはタナゴがたくさんいました。とくにイチモンジタナゴなど細いからだのタナゴは、ボテジャコと呼ばれ、親しまれてきました。

タナゴの多くは日本固有種ですが、外来種のタイリクバラタナゴなども入ってきています。よく似ているので、見分けはとてもむずかしいです。

しかし、いまではそのタナゴ類そのものがあまり見つかりません。

明治の頃に内湖を中心に生息していたイタセンバラ(ピワタナゴ:天然記念物に指定)は、もともと琵琶湖の固有種でありながら、内湖の干拓やタイリクバラタナゴの影響で、すでに戦前の段階で琵琶湖周辺から絶滅しています。また、ニッポンバラタナゴもいまではまったく見ることはできません。

ハリヨ(トゲウオ科)

ハリヨは、絶滅のおそれのある生物をリストアップしたレッドデータブックに、**危急種**として掲載されているほど希少な魚です。

とげがあって、尾の根元がとても細いのが特徴です。湧き水の池やその下流にすみ、水草の生えるあたりに産卵します。

以前は、岐阜・滋賀・三重の3県にすんでいましたが、湧き水の減少とともに生息も少なくなり、岐阜と滋賀の一部にしか生息していません。

というのも、この魚は元来北方系の魚で、夏の水温の上昇に耐える力があまりないのです。ですから、年中水温が安定している湧き水の中でしかすめません。能登川町垣見地区の湧き水で生息が確認されていますが、観賞のために捕獲することなどはさげ、自然の中で生息を守りたいものです。

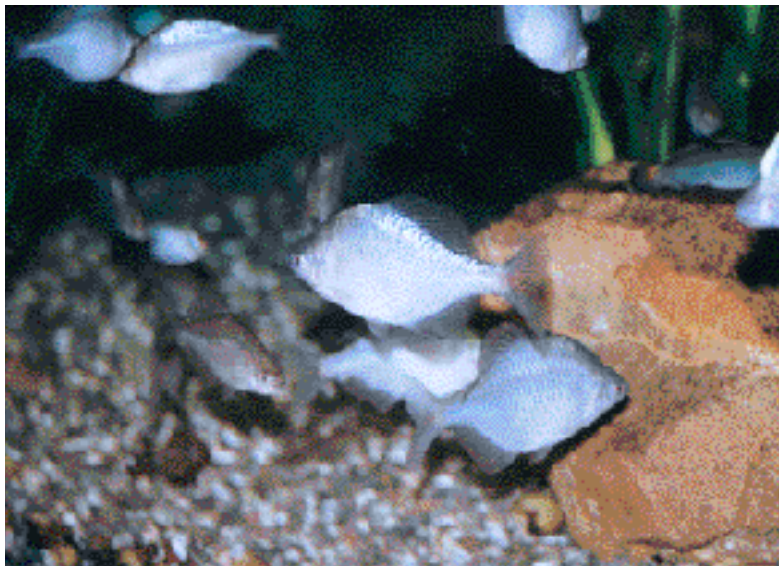
ムギツク(コイ科)

別名イシコツキと言います。

頭が平べったく、口から尾びれまで青黒色の縦じまがあり、口にはひげがあります。トビケラやユスリカなどの川の底にすむ水生昆虫を、石をこつくように逆立ちをしてとって食べます。

この魚は、ドンコの巣に集団で産卵して卵を保護させる、**たくらん**という珍しい習性をもっています。しかし、ドンコがあまりいなくなったため、この魚も貴重な魚となりました。滋賀県、福井県、三重県以西にしかいないので、能登川町はこの魚の生息の東限にあたります。

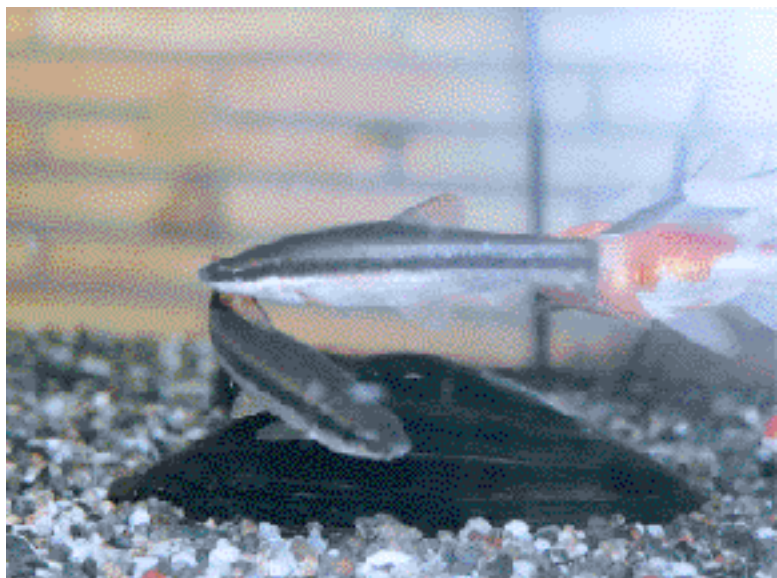
愛知川の湧き水や、美しい水の流れる川で、石や水草を隠れ家にしながら、現在もすんでいます。



タイリクバラタナゴ 外来種でピワタナゴに影響を与えたものの、少なくなっていました。



湧き水でしか生きられない魚・ハリヨ



ムギツク 口が小さくクチボソと言うところもあります。



カワムツ 少しぐらいの汚れには適応できるたくましい魚です。



ヨシノボリ 岩かげや砂地にすみ、小型の水生昆虫や付着藻類を食べます。



アブラハヤ 餌をつけない釣り針でも食いつく魚です。

川や水路で見られる魚たち

カワムツ(コイ科)

うろこのはっきりした銀色に光った魚です。深いあい色の縦じまがあります。

オスは、口の近くに「おい星」というブツブツができることがあります。オスとメスの結婚する時期にはからだ

が赤くなり(婚姻色)アカムツと言われることがあります。カワムツとよく似た魚にオイカワという魚がいます。カワムツとオイカワの見分け方は、カワムツが縦じま(頭から尾へのしま)なのに対し、オイカワは横じまになっていることです。また、オイカワは水流のゆっくりしたところにすむ傾向があります。

オイカワは、ジャコずしにするとおいしいのですが、このカワムツは油っこくておいしくありません。

ヨシノボリ(ハゼ科)

腹びれが吸ばんになっていて、いろいろなところにくっついているのが特徴です。尾の近くがオレンジ色になっていて、トウヨシノボリ(橙ヨシノボリ)とも言います。

この種類の魚は、数多く見られます。大型のドンコ(体長15センチ)やウキゴリ(体長12センチ)も仲間ですし、琵琶湖でとれるイサザも仲間です。

この種類は、ゴリと総称されたり、イシビショウと言われたり、ウロリと言われたりしています。

名前にかかわらず、つくだ煮やあめだきにしてよく食べられるおいしい魚です。

そのほか、タモロコやメダカなどを見ることができました。メダカはカダヤシやグッピーといった魚の放流で生息がむずかしくなっています。

アブラハヤ(コイ科)

アブラメとも言います。水の比較的冷たいところにすんでいます。

茶色っぽい色で、うろこが小さくてはっきりせず、油を塗ったようにぬるぬるしています。黒っぽい縦じまがあるが目立ちます。

雑食性で、水生昆虫や水中のコケでも食べます。いつも群れで生活していて、石の下や木の陰などに隠れています。

産卵も集団で行うため、砂や小石の中に埋め込まれなかった卵は浮遊し、多くの魚の餌となってしまいます。町内でも、比較的水のきれいなところならたくさん見られます。

ほかにタカハヤという近縁種(きんえんしゆ)がありますが、オイカワやカワムツでも、ハヤとか、ハエと言うことがあります。ハヤとかハエという名は、速く泳ぐ魚をさしているそうです。

カニと昆虫

サワガニ

水の美しいところにしかすめない、淡水に生息するカニです。甲羅の幅は40～50ミリで、色は赤みがあったものや青みがあったものなど、その生息場所の環境に応じて変化することができます。

能登川町では、水のきれいな 織 山の谷川と愛知川の湧き水の出る場所で観察できます。

ハッチョウトンボ

トンボの仲間の中で、羽を広げて止まる種類（不均翅類）の中で最も小さく、13ミリ内外しかありません。

オスのからだは最初橙黄色ですが、成熟すると鮮やかな紅色に変わります。メスのからだは黄色で、黒色と褐色の斑紋があってオスとはまったく異なります。通常、食虫植物のはえた湿原に生息しますが、分布は限られていて、町内でも山地部の一部でしか観察できません。

ゲンジボタル

ゲンジボタルは、住居の近くのやや雑排水の流れる川や水路に生息してきました。

幼虫は、カワニナという細長い巻き貝を食べて大きくなり、やがて土手の土の中で蛹となります。

5月下旬から6月上旬に成虫となって、輝きながら川の周辺を舞います。とても美しい風景ですが、近年は一部の地域でしか見られなくなりました。

調査してみると、自然のままの川でしか発生しないということがわかっています。河川改修されたきれいな川では、ホタルはすめないのです。

ゴマダラカミキリ

甲虫目カミキリムシ科。体長25～35ミリで、カミキリムシの中では最も代表的な虫です。からだは光沢ある黒色をしています。上の翅はとても強く、黒の地に白色の紋があります。下の翅は薄く、飛びやすい形をしているので、長い距離を飛ぶことができます。幼虫はミカン類・イチジク・クワなどの樹幹を食べてしまいます。成虫は夏に出現し、これらの小枝を食べます。夏、街灯によく集まります。各地に

ふつうに分布する昆虫

ですが、生息域の愛

知川の林が伐採

され、減少し

ています。

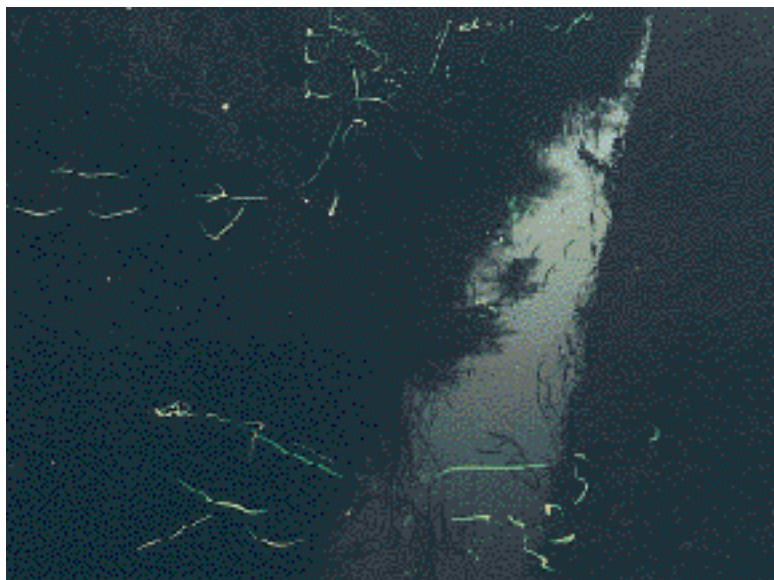
ゴマダラカミキリ
（『昆虫』成美堂出版より）
© 海野和男



サワガニ



ハッチョウトンボ



ゲンジボタルの乱舞